

研究会報告：

第2回イスラム思想研究会発表報告

(2021年3月26日, オンライン)

イブン・アラビーにおけるアラビア文字の形而上学

——バーの場合——

ガーダ・サイード
Ghada Said

2021年3月26日に「第2回イスラム思想研究会」がオンラインで開催された。報告者は、「最も偉大な師」(Shaykh al-Akbar)と称されたイブン・アラビー (Muḥyī al-Dīn ibn ‘Arabī, d. 1240) における文字論について発表し、まずはスーフィー的思想の流れにおける文字論について解説し、報告者が翻訳したイブン・アラビーの『バーの書』(Kitāb al-Bā’)の内容を紹介した。その上で、「バーの書」においてイブン・アラビーが「バー」という一つの文字から、自身の存在論の構造に組み込まれるような形而上学的な性質を持つ意味性を抽出している。そのような事例について解説し、イブン・アラビーが文字から意味性を導き出す際に用いる方法論及び基準について分析した。イブン・アラビーの思想の全体像は、文字学をなくしては見渡せない。その重要性は、「イブン・アラビーの著作から浮かび上がる世界の起源のビジョンは、彼の言語の概念と切り離せないものである」(Lory, 1998)という指摘からもうかがえよう。イブン・アラビーにおける文字学の形而上学的基盤は、世界は神の本であり、全ての被造物は永遠に終わりのない神の言葉であるということにある (Chittick, 1989)。文字学はイブン・アラビーの存在論、宇宙論の構造を理解するのに極めて重要だということである。

スーフィーにとって意味を持たないものなど存在しない。全ては、神の自己顕現 (tajallī) なのである。スーフィーは常に、神性と下僕性の関係性の中にいる。その関係性から現実を体験するスーフィーにとって、その関係性をより確かなものにするための知識があらゆるところに秘められている。文字もまた例外ではない。それどころか文字はイブン・アラビーの存在論における根源的なエレメントである。イブン・アラビーの文字論において、文字は創造の過程についての情報を秘めている。特に、アラビア語の2番目の文字であるバーは、イブン・アラビー独自の文字のヒエラルキーにおいて非常に高い地位にある。つまり、バーはより諸存在の根源に近い。そのため、バーは宇宙の創造の始まりや、神と人間の根源的な関係性に関しての情報を内包しているのである。

報告者の中心的な問題提起は、イブン・アラビーはどのような思考のプロセスを経て文字を解析し、文字が内包しているとされる神的知識 (*ilm ilāhī*) を導き出しているのかという問いである。イブン・アラビー以前のスーフィー伝統によると、その問いは答えのない問いである。なぜなら、神的知識は神からの直接の開示によって示されるものであり、その取得方法は、言葉によって伝授できないものであるからだ。しかし、イブン・アラビーが残した言葉の重要性は、その知識を論理的、哲学的に論じ、結論に到達するまでの内的プロセスを、比喩的表現を使ってであれ、緻密に書き残したことにある。その内的プロセスの工程を辿ることが目的である。その方法論は、『バーの書』の翻訳から引用しながら、イブン・アラビーが本書で「バー」から意味性を抽出する際にどのようなアプローチを用いるのかを分析することであり、本発表では、一つの文字から、イブン・アラビーの宇宙論が形成されていく工程を辿っていく際に、イブン・アラビーが用いる言語学的要素（文法、アルファベットにおける文字の位置）、あるいは物理的要素（音、形、口内の動きなど）を分析した。

以上の分析から導き出された一つの結論が、イブン・アラビーが文字から独自の宇宙論を展開する過程において、身体的感覚が重要な役割を果たしているということである。今までの研究では、イブン・アラビーの思想における想像力の役割 (Corbin, 1969) や、イブン・アラビーの文字論における直観を考察した研究 (Ono 2018) などがあった。だが、イブン・アラビー思想における身体の立ち位置に関する研究はあるものの、身体的感覚が彼の思想においてどのような役割を果たしているのかを分析した研究はいまだにない。今回の発表は、今後この問題を更に追及するための糸口になるはずである。

(東京大学大学院人文社会系研究科イスラム学専修博士課程)

Doctoral Student, Graduate School of Humanities and Sociology,

The University of Tokyo)